



樹蔭静けさ

北海道帯広三条高等学校
〒080-2473
北海道帯広市西23条南2丁目12番地
TEL：0155（37）5501
発行日 令和6年2月29日

学校評価アンケートのご協力ありがとうございました

令和5年度 帯広三条高校 学校評価アンケート(保護者)結果

A：十分（そう思う） B：おおむね十分（そう思う） C：不十分である（あまり思わない）
D：改善を要する（全く思わない） E：よくわからない
(A=4, B=3, C=2, D=1として評価の平均値)

No	評価項目	今年度 (昨年度)
1	本校の教育内容は、生徒や保護者の期待や要望にんでいる	3.1 (3.1)
2	生徒の主体的な学びにつながる授業を行い、学力の向上を図っている。	3.1 (3.1)
3	学習と部活動を両立させる適切な指導が行われている。	3.1 (2.9)
4	他を思いやりいじめのない公平公正な行動のできる生徒を育成している。	3.1 (3.2)
5	生徒の主体的な活動を促し、自主自律の態度を養っている。	3.1 (3.1)
6	生徒理解を基に家庭と連携して組織的な生徒指導や生徒相談が行われている。	3.0 (2.9)
7	生徒の進路意識を高め、生徒自らが進路選択できるよう指導している。	3.2 (3.0)
8	ホームページ、学校通信『木蔭静けさ』、学年通信などを活用して、学校の教育活動や情報を積極的に発信している。	3.0 (3.0)
9	健康と安全に関する教育が適切に行われている。	3.1 (3.0)
10	本校に入学させてよかった。	3.4 (3.4)

回答数 198 / 699 (28.3%)

過日、保護者の方々にメールでお願いした学校評価アンケートの結果をご報告します。これは本校の教育活動について幅広くご意見を伺い、次年度に活かしていこうとするもので、Googleフォームでの回答をお願いしたところですが、回収率がほぼ昨年並みの28%にとどまてしまいました。しかしながら、アンケート回答の他に多くの意見も寄せられ大変参考になるものでした。この場を借りてお礼申し上げます。

さて、結果は右表の通りなのですが、4点満点としての評価平均ですので、概ね良い評価をいただけたものと思っています。また、施設設備や校則、情報発信の方法についてご意見をいただきました。特に施設設備に関しては夏の暑さ対策に関するご意見を多くいただきました。既にご存知のことと思いますが、道教委は来年度の夏までに普通教室に簡易クーラーの設置を決定しました。残念ながら特別教室には設置されませんが、少しでも涼しい中で学ぶ環境になることを期待しているところです。また、夏休みも2日間延長し、さらに暑さが予想される場合には躊躇なく休校できるよう態勢を整えていく予定です。

この学校評価を先日の職員会議で共有しました。指摘された事項を次年度の課題として位置づけ、今後の取組に生かしていきます。

地域に求められる三条生



本校では地域と結びついた活動を展開していますが、地域からの求めに応じて本校生が様々な場面で活動しています。今回は応援団(チアリーディング)と書道部の活動を紹介します。

応援団は昨年に続き、今年も帯広氷祭りにてチアリーディングを披露しました。天候にも恵まれ、会場の緑ヶ丘公園には多くの人が集まり、チアのパフォーマンスに盛大な拍手を送っていました。リーダーの2年4組森西遥菜さんは「私たち三条チア部は氷まつりで2曲を披露しました。2年生にとっては今年が氷祭りラストステージなので少し寂しかったです。当日は沢山のお客さんが見に来てくださりとても嬉しくて寒さも吹き飛びました。これからも笑顔と元気を届けられるように頑張ります！」と語っていました。

書道部は2月10日、ホテル日航ノースランド帯広で、春節(旧正月)で来日した観光客に楽しんでもらおうと、書道パフォーマンスを披露しました。加藤由唯部長は「海外の方に披露するのは初めてだったので緊張しましたが、コミュニケーションをとったり、一緒に盛り上がって楽しむことができたのでよかったです」と話してくれました。

地域が三条生の力を頼りにしていることを示す好例でした。



本校探究コーディネーター 長岡行子さん 十勝管内教育実践表彰受賞



令和3年度より本校で探究コーディネーターとして、本校の探究活動をサポートしていただいている長岡行子さんが、本校での活動が認められて令和5年度十

勝管内教育実践・活動表彰を受賞しました。このほどその授賞式が行われ、長岡さんは「学校教育への関心と、惜しみなくその力と繋がりを差し出してくださる地域の方々の協力のお陰です。これからも微力ながら子どもたちの笑顔とそのまますの存在をまるごと受け入れて伴走していけたらと思っています。この度はありがとうございました。」とおっしゃっていました。

今後とも本校と地域をつなぐ大きな役割を担っていただきます。こちらこそよろしくお願ひします。

節電運動結果

今回も昨年度より若干使用量が増えましたが一昨年よりは下回っています。

教育活動に制限がなくなった中で、この数字は立派です。継続して節電に協力をお願いします！

	1月
一昨年度	21,304kWh
昨年度	19,188kWh
今年度	19,319kWh

第35回 3-5担任・テニス部顧問 野田 知里 教諭

今しかできないことにチャレンジしよう！



◇コロナ禍の中での入学から3年

本校で初めての卒業生を送り出すことになります。この年次はコロナ禍の真ただ中に入學した生徒たちです。先が全く見えない中でしたが、ともに成長できた3年間だったと思います。1年目と2年目は私は生徒会担当でしたので、ひとつひとつの行事をどのようなものにするのか、生徒たちと手探りしながら試行錯誤の日々でした。それでも社会や時代の変化に合わせて行事も少しずつ変えていくという答えのない挑戦でした。

そして最上級生として迎えた今年は無制限の行事となりました。といっても経験したことがないので、どう生徒たちが動かないか不安でした。ところが生徒たちは見事にリーダーシップを発揮して、行事を作り上げていったのです。本当に頼もしい存在でした。発想力、表現力、今まで見たことのない様々な表情を見せてくれました。特に私が素晴らしいと思ったのは、色んな考え方の人を受け入れる柔軟な心や寛容な態度でした。大人の私が彼らから学んだような気がします。

◇岡山への進学は私の挑戦

私はいつも生徒たちに「今しかできないことに挑戦して」と言っています。「今」を大事にしてほしいのです。迷ったら、まずやってみよう。私自身もそうしてきました。

私が高校生の時は、「自分は何をしたいのか？」「何になりたいのか？」「自分に合うことは何か？」と常に悩んでいた生徒でした。結局、これだという答えは見つかりませんでしたが、そんな葛藤の中で調べたり本を読んだりしていくうちに宇宙に惹かれ、それを学ぼうと

決めました。その時、自立するために自宅から離れた所に行こうと決めました。それで岡山理科大学に進学することにしました。どちらかといえば人見知りの私が、親元を遠く離れるだけではなく、女子学生の少ない理科大学に進学するのは当時の私にとっては相当高いハードルでしたが、私を突き動かしたのは「今しかできない」という思いでした。

◇北海道を出ていくことのすゝめ

岡山での大学時代は本当に面白かったです。あちこちで「～じゃけ」とか「～じゃが」が飛び交う言葉の違いはもちろん、文化そのものの違いに気づけたのはよかったです。私は歴史というものは暗記するものと思っていたのですが、あちらでは生活の中にしっかりあるものなのです。近所には当たり前のように古墳や史跡があり、神社やお寺は子供の遊び場であったり、通りすがりに手をあわせるという生活そのものであることに一番驚きました。地域のお祭りも、北海道のお祭りのようなイベントではなく、そこに住む人々の生活の延長で、和気藹々とした雰囲気の中で行われていました。だから外から来た人を排除するのではなく、「よく来たな～。一緒にやろう！」と言って受け入れてくれる、そんな懐の広さを感じました。

外に出ていくことは簡単ようで実はそうではありません。海外留学を含めて、チャンスがあるのならばぜひチャレンジしてみてくださいね。



インタビュー

2年「探究」での取組を発表して、道教委主催「地学探究アワード2023」地域未来創造賞受賞

1組 大山 駈さん 1組 谷保杜和さん 2組 市山ひおりさん 3組 池原透真さん
3組 市山ひまりさん 3組 塩谷明里さん 4組 野中琳奈さん 5組 羽根田葉月さん



地学協働アワードは、地学協働のより一層の推進と活性化を図ることを目的に道教委が実施しているもので、本校を代表して2年「教育・スポーツ」類型の「不登校」探究チームが参加、予備審査を経て地域未来

ですが、学校以外にも教育を受ける環境はあるのだということを理解しました」と述べると、市山ひおりさんも「不登校生を無理矢理学校へ行かせるのではなく、どう接するかを考えるべきだと感じました」と、不登校の生徒との交流を通して大きな気付きを得られたようです。谷保さんは、「『今』がづらい生徒に対して『未来』を心配する大人や第三者との価値観のズレによりややこしくなっています。不登校の状態になったときに、頭ごなしに否定するのではなく生徒に寄り添い、あせらずに話し合うことがよりよい関係性を作るための第一歩だと感じました」とまとめてくれました。

創造賞を受賞しました。2年の類型別探究でテーマを「不登校について」として集まったメンバー。当初の思いは「不登校を減らすにはどうしたらよいか」だったと言います。ところが探究を進めていくうちに「自分の中に勝手な偏見を持っていたことに気がきました」と野中さん。塩谷さんも「どうしても『負』の面で特別に感じてしまっていました」と話します。

その中でも大きな転機になったのは不登校支援をしている佐々木祥子さんを招いてお話を伺ったことだったようで、どうしてもその活動に参加したいと考えたメンバーたちは、担当の堀口教諭に申し出ます。それが学校を動かし、探究活動で公欠を認める決定がなされます。市山ひまりさんは「実際にSmilyの活動（不登校生徒への支援活動）に参加させていただいて、不登校の生徒のイメージが180°変わりました」とした上で「教育を受けるイコール学校に行くことになってしまいがち

アワード当日の発表を一人で担った池原さんは「この探究を通して経験したことを自分たちの言葉にして発表するという貴重な経験ができました。テーマを決めるところから発表まで生徒自身が主となってやっている学校は少ないように感じ、三条高校のCプロの良さはここにあると感じました」と話してくれました。この活動全体を通して、羽根田さんは「どうすれば自分の伝えたいことを人に伝えることができるかを考えることができました」と言い、大山さんが「『全ての人に教育を受けさせるために』という幅広い視点に変わることができました。そしてやってみたいことを実行に移す力が一番ついたと思います」と締めくくってくれました。

主体的に動く三条生の真骨頂ここにあり、ですね！

(撮影当日、羽根田さん欠席でした。ごめんなさい。)